

| | |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title | 一、エトルリヤ研究の現状 |
| Sub Title | |
| Author | 近山, 金次(Chikayama, Kinji) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1937 |
| Jtitle | 史学 Vol.16, No.3 (1937. 11) ,p.135(463)- 148(476) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 海外史壇紹介 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19371100-0135 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

海外史壇紹介

I、エトルリヤ研究の現状 近山金次

一九三六年、イタリヤに於けるエトルリヤ學研究の權威 Bartolomeo Nogara 氏がその蘊蓄を傾けてエトルリヤ研究の現狀を發表した「エトルリヤ人とその文明」なる名著は直ちに Dromard-Mairot の手によつてフランス譯が出されたのであるが、この譯書を前にして Collège de France の教授である Albert Grenier が紹介と批判とを兼ねた一文を Revue Historique, 第一七八卷第三号にのせたもののが、この報告の骨子である。

Grenier 氏はその紹介に先づて先づ今回の著書がエトルリヤ研究の現狀を知るに最もよき書物なること、Vatican の Museum のエトルリヤ研究室に於ける Bartolomeo Nogara 氏は既に三十年前

るのである。彼はその項目を六つに分け、一、エトルリヤ人の起原の問題、二、エトルリヤ人の言語の問題、三、イタリヤの先史考古學とエトルリヤ人の歴史、四、エトルリヤ人の宗教の問題、五、エトルリヤ人の藝術の問題、六、エトルリヤ人の文學の問題をそれぞれ詳細に概説してゐるのである。

一、エトルリヤ人の起原の問題

エトルリヤの起原に就ては早くより東方說と北方說とがあつた。東方說に於てはエトルリヤ人が小アジヤのリヂヤ海岸から海を超えてイタリヤに渡つて來たものだと説くのであつて、この説は Herodotus 以来存在し、今日に於ても優勢である。この説に最初に反対を唱へたものは彼の有名な Niebuhr (一七七六—一八三一) であつた。Niebuhr はエトルリヤ人もラテン人、ウンブリヤ人と同じく北方のアルプスを超えて中央ヨーロッパから到

來したと云ふのである。之即ち北方說である。

Niebuhr は Halicarnassus の Dionysus がエトルリヤ人とイタリヤの他部族との間に根本的な差異があることを指摘し而もエトルリヤ人がラテン人などと同じく土着のものなりとした記事を擧げ、更に Livius がアルプスの Raetia 地方にエトルリヤ人の遺蹟があることを記してゐることを以て、之こそエトルリヤ人の根源地であるとしたのである。けれども此の説は決して妥當なものであるとは言へなかつた。Dionysus の記事はエトルリヤ人が古くより獨立した特徴ある民族であつたことを物語るとは言へ、それが中央ヨーロッパより來たと云ふ様なことは何等言つてゐるわけでは無く、Livius の記事に於ても之は要するに間違つたひろい読みであつて Livius は明かにこの Raetia に於けるエトルリヤ人の遺蹟なるものが實はガリヤ人の侵入によつてポー河の平原地方から驅逐せられ

て來たものの殘したものであることを記述してゐるのである。

今日、北イタリヤの Tessin, Valtelina 兩河に沿ひ、或は Adige 上流の各地に於ける地名からもエトルリヤ語の痕跡を辿り得るのであり、又之等の地方に於てはポー河流域のエトルリヤ語と同系統のベットによつて書かれたエトルリヤ語と同系統の言葉の碑銘をも見ることが出来るのであるが、之等の碑銘は何う見ても紀元前四世紀末若くは三世紀初より古いものでは無く、明かにガリヤ人の北イタリヤの定住以後のものなのである。従つて之をエトルリヤの起原に結びつけることは到底不可能な話であると云はねばならぬ。之より古いものでアルプス山地やアルプス以北の地に於てエトルリヤと連絡の可能性ある遺物と云ふものは未だ曾て何一つ發見されて居らぬのである。アペニン山脈の北に於てさへ紀元前六百年以前になるとエト

ルリヤ文化の痕跡は一つも見あたらぬのである。當時アペニン山脈の南ではエトルリヤ文化が榮えてゐたのであるから、それが北方に進出した時は既に出來上つた文化として出て行つたのである。Niebuhr のこの假説が重要な意味を有つたのは之が第十九世紀末の言語學的研究と結びつけられたからである。即ち言語學者はエトルリヤ語を印歐系の言語として説明しようとしたのである。何れにもせよエトルリヤ人のヨーロッパ起原説を考古學に於て證明し得ると信じた優秀な學者が大勢ゐたからして、この説は言語學的研究が失敗してもなほ生き残つて居つたのである。然し今も述べた様にアペニン山脈以北にエトルリヤ文明以前の痕跡を全く見ることが出来ないのであるから此の説は成立たぬものと言はなければならぬ。かくて吾人はエトルリヤ人を以てリヂャの移民であつたとする傳説に立歸らなければならない。ヘロ

ドートースに始る此説を裏書きする材料は無いであらうか。

一八八五年 Durrbach と Cousin が Lemnos 島に於て發見した有名な碑銘は書體と云ひ言葉と云ひイタリヤに於て見出されるエトルリヤの碑銘と驚く程酷似して居り、又リヂャに於てもサルヂスを發掘中のアメリカの研究團が最近掘出したリヂャ語の碑銘を見ると其の言葉は明かにエトルリヤ語と相違してゐるにもかかはらず、リヂャ人の使用せるアルファベットの中には確かに8の字が見あたるのであり、之は殆んど例外的にしかギリシヤ世界に知られて居なかつたにかかはらず、エトルリヤではFの音を表す字として盛んに用ひられてゐるのである。凡て之等の事柄は年代にして紀元前六世紀を遡るものでは無く、當時エトルリヤ人はイタリヤに定住して相當の時代を経過してゐるのであるから、之を以て直ちに起原説の材料とする

することは不可能であるにしても、兎も角相當古くから小アジヤの海岸地方で兩者の接觸があつたことは想像されるのである。更にまたイタリヤにある最も古いエトルリヤ人の墓と稱せられるものは紀元前八世紀のものであるが、之は明白にギリシャ・東方的 Greco-Oriental のものであつて、同時代の小アジヤに於て見出されるところの様式（大きな圓塚）であり、其處にも兩者の連絡が暗示されると言へよう。又宗教信仰の點に於ても北イタリヤの Piacenza に於て發掘された銅製の羊の肝臓の表面には各部分を表す約四十體の神の名が刻まれてゐるのであるが、之は明かに占ひに使はれたものであつて、土製ではあるが全く同じ様式のものがバビロニヤやヒッタイトの地方で屢々發見されてゐるのである。又もし Suidas (十世紀の人) の傳へてゐることに誤りが無いとすればエトルリヤ人はバイブルに描かれてゐるものと酷似せ

る天地創造の話を語り傳へてゐたものであつて此點からも東方との連絡が想像されるのである。

けれども此の東方説にとつての最大の障害となるものはイタリヤ古代の考古學に於ては新たに異民族が海から到來せる證據を見出すことが絶対に出來ないと云ふことである。チレニヤ海岸の Caeré-Cervetri & Corneto-Tarquinia では舊鐵器時代の墳墓が研究され、吾人は紀元前一千年の頃からエトルリヤ全盛時代までずっとその發展を辿り得るのであるが、一體どの時代にエトルリヤ人の到來を置いたらよいのか其は不明である。東方原産の物品は紀元前八世紀初の頃より土着民の墳墓に現れ、時のたつにつれて次第に物品の數も殖え、墓も大きくなり、在來の如き火葬にして骨ばかりを皿、鉢、銅鐵の小道具と共に埋めた簡単な小さな穴では無くなり、八世紀末のものなどになると立派な部屋を造つて死體をそのまま數々の豪奢な

小道具と共に埋めてある。けれども此の急速な發展はフェニキヤ人やギリシヤ人の交易に刺戟されてエルバ島の鐵やトスカナの錫を採掘するやうになつたからの話であり、異民族の到來を物語る何物でも無いのである。兎も角、エトルリヤ人は何時からかトスカナの海岸地方を占領し、而も他のイタリヤ人と異つた土着民として存在するのである。

二、エトルリヤ人の言語の問題

若しエトルリヤ人の言語が讀める様になつたら或は又その言語系統だけでも所屬が明かになつたらエトルリヤ人の起原の問題はもつと明確になる筈である。記録文獻が缺けてゐるわけでは無く、六、七千の數に上るエトルリヤの碑銘は容易に讀む(音讀)ことが出来るが意味は全く分らない。其は何れもギリシヤ文字で書かれ、その大部分は極めて簡単な墓碑銘であり、中にはラテンの譯文が

付せられたものまである。けれどもその中に纏つた知識を得ることは出来ず、長い對譯文も發見されぬため、墓碑銘の簡単な言葉しか分らないのである。この謎の言葉の解決にささげられた努力も決して僅少なものではなく、自らその研究に參與した Nogara 氏は次の如く極めて簡単に今迄諸々の言語學者によつて取られた方法とその結果とを記述してゐるのである。

最初、印歐系言語の比較研究がもたらした結果に眩惑されたエトルリヤ學者はエトルリヤの文献の中に何かの言語系統と聯絡のつき得る語根をさがし求めたのであって、即ち一般に語源學 *étymologie* 的方法と呼ばれるやり方を取つて見たのである。一八八〇年頃 Corssen はラテン語及びイタリヤの方言によつてエトルリヤ語が説明し得ると信じてゐた。之はエトルリヤ人が他のイタリヤ人と同じくアルプスを越えて來たものだとする北方

起原説に對する勝利を意味するものであつたが、之は少くとも言語に關する限りたちまちの間に破れてしまつた。即ち Deecke が間もなく Corssen の語源學的解釋が全く間違つてゐることを指摘してしまつたのである。一八九〇年に名著「エトルリヤの藝術」を發表した J. Martha は一九一二年に至りエトルリヤ語を印歐系の語根で無くフィン・ウグリ finno-ougrienne 系即ちフィン、ハンガリヤ、トルコの系統によつて説明せんとし、碑銘を翻譯したのであるが、その方法も翻譯も全く證明出來ぬ一つの試みに過ぎないものであつた。Corssen の失敗以來、イタリヤの學者等は、殊に Nogara 氏の先生にあたる Elia Lattes をも含めて一つの極めて骨が折れる質實な方法を唱へ始めた。それは組合法 *Méthode combinatoire* と呼ばれるものであつてエトルリヤ語の文献そのものを比較研究することにより、その形式と言葉の知識を引か出し

て來ようと云ふのであつた。先づ第一に碑銘の性質、墓誌とか獻納文とか、或は儀式的のものとか云ふ様な種類に従つて大體の知識を得ることが出来る。第二には或る言葉になると古代の言語學者の註釋や對譯の碑銘などがあるために意味が知られてゐるのであつて、例へばエトルリヤ語で Zixu が Scribonius と云ふ固有名詞であれば Zix なる

エトルリヤの語根はラテン語の scrib (ere) 「書く」と云ふ字と相當することが見別けられるのである。之等の知られた言葉の見出される幾つかのテキストに立入つて、その他の言葉をも位置聯絡を比較對照する事によつて意味をうかがひ知らうと云ふのが此の方法の眞髓である。數限りない學者がその知識を傾けつゝしたこの事業は想像も出來ない程の忍耐を必要としたものであり、Penelope の織物の如く互に他の仕事を少しづつ壊し合ふ様な破目に立到つた。相當の數に上る收穫もあつた

が、文献の大部分は依然として説明のつかない状態そのままに取のこられてゐたのである。

ところで最近、二つの有力な試みが現れることになつた。一はイタリヤの偉大な言語學者 Trombetti (ル) の人は La lingua etrusca なる名著を書く) のものであり、他は W. Schulze 氏のものである。

Trombetti はその驚くべき該博な知識を以て語源學的研究と前に述べた組合法とを結びつけようとしてゐるのである。而もその語源學的研究たるや彼の場合には驚くほど範圍が廣められて居り、エトルリヤ語と近い關係にあると想像される言語、更に彼がエトルリヤ語の語根の意味を求める言語群は勿論のこと、人類言語の原始的根本的統一性を主張する彼の立場から印歐系、セム系より支那語、Bantou 語に至るまで凡りと凡ゆる言語を參照するのである。或點は正しいかもしけぬ

が、又屢々間違つてゐる場合もある様である。彼の學識と常識との力によつて彼は極端に走ることはない。彼は凡てを理解し凡てを説明しようなどとは思つて居らぬ。彼は斷言すると云ふよりも寧ろ提議し研究する。而もその彼が自ら告白してゐる所によれば、彼は未だ「エトルリヤの鍵」を握つては居らぬのである。けれどもその研究は次の如き成果を上げてゐる。

彼が殆んど確定的な語尾變化 déclinaison と動詞變化 conjugaisons とを有つエトルリヤ語の眞の文法を建設することが出來たのは組合法による研究の結果であつた。昔の語根から残された種々な要素が種々な數で語根に結びついてゐるので、文章の中に於けるその意味を一々検討しなければならない。彼は一流の言語學者として其の先輩の努力を整理して文法的に系統化したことは誠に立派なものであつた。不幸にしてその語彙は言語學の方

法によるため餘り信用することが出來ないものである。要するに彼の博學とその方法には敬服に値するものがあるが、Nogara氏をして言はしむれば Trombetti の仕事はエトルリヤ語の中に自分の假説を見出したものに過ぎないのである。けれどもエトルリヤに關する音韻學、語源學、語彙の要素を系統的にならべたことは確かに一つの進歩であり、何人も將來必ず一應は之によつてしらべ、この整理せられた材料を利用せねばならぬものであらう。Trombetti によればエトルリヤ人の起原に關する問題はその言語學的知識の及ぶ限り未だ何等確定的な材料は存在しない。エトルリヤ語と云ふものは恐らくコーカサス系と印歐系との間に介在する死語の一群に屬するものなのであらう。この死語の一群众はリヂャ語、リキヤ語と同じくアジヤに於て古く使用せられた、即ち Asianiques と稱せらるるものに屬し、ギリシャ以前のエーゲ海に

於て、或は又廣くイタリヤをも含めた地中海地方に於て使用せられた言語に屬するものなのであらう。フランスに於けるバスク語、北アフリカに於けるバー・バリ語も同じ系統のものの殘物であるが其を東方と結びつけることは問題である。従つてたとヘレムノス島の碑銘がエトルリヤ語に酷似してゐてもエトルリヤ語の特徴はエトルリヤ人のリチャ起原説、エーゲ起原説を證明する材料となるものでは無いのである。今日やうやく認められ始めたばかりの之等 *Asiانيques* 語の研究は恐らく將來もつと明確な材料を提供してくれることであらう。兎も角これまでエトルリヤの東方起原説に反対の材料は何一つ無かつた。しかしまだ其の明確な證據となるものも存在しなかつたのである。W. Schulze 氏の仕事は之と全く別のもので遙かに龐大な著述であるが範圍はずつと狭くエトルリヤ及びラテンの固有名詞、即ち地名人名の研究で

ある。地名に就ては既に數名の學者が小アジア、クリート島、イタリヤ、スペインに於ける明白な共通性を指摘して居るのであり、この證明は古代に於けるアジヤ地中海言語系統の存在を主張する Trombetti の意見と全く一致するものである。この系統の地名はイタリヤに於てエトルリヤ人の領域に限定されず、エトルリヤ人の侵入を見なかつた南イタリヤ、シシリー島に於ても驚くばかり數多く存在するのである。ラチウムの地名とクリント島の地名との間にも比較が成立するのである。Schulze 氏の統計は Ribezzo 氏が「エトルリヤの地名は恐らくクリート島を中心とする一系統に属するものであり、この系統はコーカサスからスペインまで地中海岸の地方に行渡つてゐるものである」と言つた説に全く一致してゐる。要するに之は地中海の古代民族ミノス人のものであるかもしない。

人名の研究は之よりずつと複雑な結果を示して居り、エトルリヤとラテンの固有名詞には明白な類似が見られる。Nogara 氏は之に就て二つの假説が成立つと言つてゐる。(一)エトルリヤ人とラテン人は起原を同じくするものか(二)或は何れかが他に著しき影響を與へたものである。言語に根本的な差があることを思へば第二の場合のみが可能であり、歴史的事情を考察すればエトルリヤが與へた影響のことを先づ考へねばならぬのである。何れにもせよ、人名の研究はエトルリヤ語の知識に就て貢獻するところが甚だ貧弱であつた。ただ注意すべき事柄としてはエトルリヤの人名に於て屢々母系の示されてゐることである。或學者は之を以てエトルリヤに於ける母權政治や一妻多夫の制度を主張しようとするが、其處まで行かなくともエトルリヤに於てはミノス時代のクリート島に於けると同じく婦人が男子と同等に取扱はれてゐた

形跡があり、男子と並んで儀式や饗應に臨んで居るのであり、この婦人の自由とその家庭社會に於ける重要性はヨーロッパ的のもので無くして寧ろ地中海的な古い傳統を示すものと考へられる。若しローマの婦人が社會的に法律により重要な地位を與へられないのにもかかはらず、ローマの家庭生活に於ける母がギリシヤの社會に於ける主婦よりずつと高い地位を與へられてゐるとすれば其は恐らくエトルリヤが傳へ残した影響であるかも知れないのである。

三、イタリヤの先史考古學とエトルリヤ人の歴史
イタリヤの先史時代を見ると明かに對立した二つの文化の流れが認められる。新石器時代から青銅時代にかけて固有の地中海的文化があり、紀元前二千年紀の中葉に於ける青銅の普及以後になるとヨーロッパ的文化の出現を見るのである。後者の出現は最初アルプス山麓の湖沼に認められ、次

で東部 Emilia 地方 ボロニヤ近邊)に擴がつてゐる形跡がある。この文明はポー河流域からやがて南のタレンツムまで擴がり、鐵器時代の初頃になるとアペニン山脈の東北部地方に於て所謂 Villa-nova 文化を建設することになつた。ラテン人、ウンブリヤ人の移住が結びつけて説明される此の文化は明白にアルプス以北の中央ヨーロッパと連絡を有してゐる。この文化が土着の文化と混淆し、後者の言葉は僅かに若干の地名となつて殘つてゐるのみである。ところでエトルリヤ人はこの侵入者とは根本的に異つてゐるのであり、原住民の子孫と考へることも凡ゆる點から見て不自然な事情にあるのである。別系統の移住者と見なければならぬ。エトルリヤの移民はその墳墓の状態より見て紀元前九世紀頃に行はれたものらしく、ギリシヤ人が南イタリヤ、シリィに移住した直前の事柄であつたと推定される。彼等のこの方面に於

ける文化は紀元前八〇〇—六〇〇にかけて最も進展した。その勢力は一時カンパニヤまで延びてゐたらしい。従つて交通の要路にあたるローマは最も重要な存在であつた。ローマ七丘のうち、パラチノは土着民の建設になつたものと思はれるが、カピトリは明白にエトルリヤのものである。エトルリヤのタルキニウス家がローマを支配した時代は紀元前七世紀末にあてられてゐるが、事實カピトリからは六世紀のエトルリヤの煉瓦が發見されし、カピトリの神殿がエトルリヤの建築家(Veii の町から來たもの)によつてエトルリヤ風(破風の裝飾等)に建てられたのも六世紀末の話である。紀元前五〇〇年頃、このエトルリヤの支配に對し士着民の暴動が起り、ローマ共和國の歴史が始まるのである。

リヴィウスの記述によればエトルリヤ人がカンパニヤを領有してゐた頃にはその勢力はアペニン

を越えてポー河の流域に及んでゐた。この地方の中心は後のボロニヤにあたる Felsina にあつた。なほアドリヤ海にも彼等は Spina, Ravenna, Adria の諸港を有してゐた。以上の事柄は凡て考古學的にも證明せられ何等の疑點も存在しないが、ただこの地方への進出は時期から見ると少し遅く第七世紀末か六世紀初で、従つてボロニヤにはそれ以前の遺物が數多く發見されるのである。このポー河の流域の勢力はガリヤ人の侵入まで即ち四世紀の前半まで存續してゐる。

以上の如き材料によつて想像されるエトルリヤの全盛時代は紀元前六世紀にあたり、その頃のエトルリヤはアテネをもしのぐ最も富裕な活氣ある存在であり、カルタゴと結んで西部地中海に君臨してゐた。エトルリヤの没落は土着民の成長と云ふより、ギリシヤのペルシャに對する勝利と云ふことによつて説明されるであらう。ギリシヤが

地中海の霸權を握つたと云ふことは必然的にエトルリヤの衰亡を導いたのであつた。シリヤからカルタゴの勢力が驅逐され、南イタリヤのギリシヤ諸都市が活氣を呈し、交通の要路にあるローマが次第に成長して來るのに際して、エトルリヤ諸都市は互に狭い自己の利害に拘泥して一致を缺かず、例へば Veii の町がローマ軍に取囲まれても之を見殺しにすると云ふ様な有様であつた。そして最後の決定的な打撃を四世紀初に於けるガリヤ人の侵入によつてかうむることとなるのである。そして考へ方によればガリヤ人の侵入こそイタリヤの霸權に向ふ道をローマの爲に開いたものと言へる。爾來ガリヤ人は北イタリヤに定住し、エトルリヤはローマに援助を求めることとなつた。ポエニ戰役に於てハンニバルは北イタリヤのガリヤ人を味方としたが、エトルリヤ人はローマの味方であつた。スーラが内亂鎮壓の折このエトルリヤ

地方に破壊、彈壓を加へて以來、このトスカナの
地方は單なるローマの一地方たるに過ぎぬものと
なつてゐる。

四、エトルリヤ人の宗教の問題

Nogara 氏の研究によればエトルリヤ人の宗教
は固有のもの、ラテン人のもの、ギリシャ人のもの
などの影響を受けて居り、文獻に現れる三十三體
の神のうち、全く純粹なものは僅かに十七體のみ
である。最高の神 Tinia は他の二神に助けられ、
之がカピトリの三神であるが、斯かる三位一體の
思想はギリシャには存在せず、イタリヤ固有のも
のでも無く、クリート島に痕跡を見る地中海的な
傳統であらうかと思はれる。次で十二體の男女の
神がある。又エトルリヤ人の間に於ける雷光の占
ひは有名である。凡てかかる思想は多かれ少かれ
東方にその根源を見出しえるものばかりである。
それに引かへ土地の神は全く固有の色彩を傳へ、

ローマの Lares, Penates をしのばすものがある。
ともかく Nogara 氏の蘊蓄を傾けたこの章は、ロ
ーマ宗教史の貴重なる入門書として必讀の文字で
ある。皇帝崇拜の内容に結びつけて多くの説明が
ある。

五、エトルリヤ人の藝術の問題

エトルリヤ人の藝術に於て最も問題となるのは
其の墳墓に見出される死者の肖像である。煉瓦や
石の棺に描かれたその無數の肖像は年代から見て
紀元前六世紀の初より前二世紀の頃まで辿り得る
のである。その傾向は全く寫實的である。繪畫は
最初からイオニヤ風の類型的なものと、實生活を
描いた寫實的なものとがある。そして此の兩者は
屢々混合して見出される Nogara 氏が最も力を入
れて詳細に論ずるのはエトルリヤの建築であり、
その獨創性を説き、ローマに對する影響を説明し
てゐる。丸屋根 (Cupola) など其の一つである。

Nogara 氏はギリシャ建築に對立させてエトルリヤ傳統のローマ建築様式を主張するのである。ローマ史との連絡に於て誠に興味深いものがある。

六、エトルリヤ人の文學の問題

エトルリヤ人の文學は何一つ殘つてゐるわけでは無いのであるが、Nogara 氏はエトルリヤに文學があつたか、と云ふ問題を提出して、凡ゆる點から見て文學があつたと云ふ結論に到達してゐるのである。ローマの史家が云々する教義(doctrine)の書は後の編纂になるもので恐らく口碑によつて傳へられたものであらうが、その占ひその他をふくめて宗教文學は或程度まで科學的であり心理學的なものであつたらしい。詩歌の存在も容易に想像され、殊にその敍事詩はローマの建國史の材料に使はれてゐるらしく思はれる。Varro は Volnius なるものがエトルリヤの悲劇を書いたと云つてゐるが、この方面に於ける傳統も相當古くからあるが、この方面に於ける傳統も相當古くからあつ

たらしいのである。Nogara 氏の師 Elia Lattes はイタリヤの古詩 *Saturnius* の起源をエトルリヤに結びつけてゐるが、之は未だ學界の認める所となつて居らない。

Nogara 氏のエトルリヤ研究の力點はローマ史との關聯にある。(一九三七、六、一六)

II、最近のギリシャ史界 平山榮一

(Revue historique, Tome CLXXVIII, Sept.-Oct., '36 所載
Paul Cloché 出の解題 Histoire grecque (1931-1933) による)

I、通史 M. Cary, A History of the Greek World (323-146 B.C.) 本書は上述の年代に於けるギリシャ世界の歴史の極めて明確な敍述である。本書の最も興味ある見解は I、クニスチック時代に於て、戰爭は古典時代に於けるよりも、科學的、人道的となつた。I、君主はこの時代に於て最も活動的であり、無爲の王 (rois fainéants)